

ツタ（ナツツタ、アマズラ）

牧 幸 男

私が学んだ母校の高校は壁面がツタに覆われ、夏の緑、秋の紅葉が美しかった。しかし、青葉の頃に、毛虫が発生して教室まで這ってくるのでツタにはあまりいい思い出はなかった。成人し蔦の絡まる建物を見ると、自然を上手に利用しているに関心している。同時に、秋の紅葉の美しい姿に目を奪われ、持ち主がどんな人かと想像するようになった。最近、各地に壁面に蔦這わしている建物も多くなった。その一つに甲子園球場がある。この球場は、私のファンの阪神タイガースのホーム球場のため、何度か足を運んだがよく手入れがされていて美しい。

私は壁を這う蔦に出会うとオー・ヘンリーの『最後のひと葉』の短編小説を思い出す。あら筋を簡単に紹介すると「窓から見える蔦の葉が全て散ってしまったら死ぬと思っている病身の娘ジョンジーのために、老画家ベアマンが最後の力を振り絞って一枚の蔦の葉の絵を壁に描く。激しい嵐の夜が去った翌朝、もう全部散ってしまったと絶望的な思いで窓の外を見つめた彼女は、それとは知らず『最後のひと葉』を見つける。この葉の姿に心を動かされて生きようと思なおす。」物語である。この物語の結びは、老画家が彼女のために蔦の葉を描いて亡くなったことを友人が「ああ、ジョンジー、あれはベアマンさんの傑作なのよ・・・最後の一枚が散った夜、あの人があそこに描いたのよ。」と語る場面である。娘を死なせてはならないという老画家ベアマンの思いが込められていた蔦の絵の話である。おそらくこの美しい物語を知る人は多いだろうが、私は生の大切さを心に留めている。

蔦はアジアから北アメリカに15種が自生しているツタ属の総称である。この中で蔦は常緑性と落葉性に分類できる。私たちが良く目にする種類は「蔦」（ナツツタ）、「木蔦」（フユツタ）、「ヘデラ・ヘリックス」、「ヘデラ・カナリエンス」である。ヘデラ・ヘリックスはグランドカバーが主で、ヘデラ・カナリエンスは常緑の大葉でグランドカバーに主であるが一部壁面にも使われる。この項ではいわゆるツタ、キツタについて限って説明する。



キツタが絡まる家



蔦の液果

蔦は、日本及び中国に産し、雌雄同株の**ブドウ科**の落葉の蔓植物で、茎は大きいものでは直径4cmに達する。巻きひげは葉の反対側に出て、小型で枝分かれし先端部に吸盤があり、他物に吸着する。蔓を無理やり抜くとポツポツと吸盤の形が残ることが多い。葉は、葉柄があり互生し卵形、あるいは2〜3の深い切れ込みがある。

夏、短い花序を短枝の先端に出し、黄緑色の小さい両性花が咲き、液果は熟すると黒色になる。葉は秋になると紅葉しツタモミジになる。木蔦は東アジアに分布し、山野に普通に見る**ウコギ科**の蔓性低木。岩上や樹上に成長し、古い木ではかなりの長さに分枝して繁茂し主幹は巨大になる。葉は互生し厚く硬く、表面は光沢がある濃い緑色で全縁卵形あるいは3裂したり5裂したりする。木蔦は常緑であるので、落葉性の蔦をナツツタ呼び区別している。

紅葉の美しい日本の蔦をイギリスに伝えたのはルド・ヴィチ John Gould Veitch (1839~1870)である。このため、ヨーロッパの古い建物に蔦が美しく紅葉している光景は日本から渡った蔦が主である。ヨーロッパの蔦は「・・・ディオニヅ(バッカス)の祝日には、ディオニヅを祀るために、蔦の冠をかぶり、行列にあずからざるをえなかった。」と『マカベア後書』(BC171~161?)の記載に見られるように蔦は古代ギリシア人がバッカスに捧げた植物のひとつだった。葉の付いた枝を贈るのは友情のしるしとしてキリスト教ではこの習慣を利用するようになった。また、以前は蔦を花輪のようにして良く酒場や旅館のドアの外に飾っていた。これはバッカスに結びつけた習慣から生まれたのであろう。

アメリカでは蔦 ivy は赤レンガにまつわる深い由緒と古い伝統を意味し、Harvard、Yale、Princeton、Cornel 等の大学を“Ivy Collge”と呼んでいる。ハーバード大学の創立者 John Harvard 像の左足を触ると頭が良くなると言われている。私も触れたが効果はないようだ。

我が国の蔦の記述は『万葉集』(629~759)が最初であるが、該当植物はテイカズラ(別名:石葛、石綱、絡石)が定説で、蔦そのものではない。しかし、平安時代になると、葉を落とした蔓から出る樹液が甘いので、これを煮詰めて甘味料(甘葛)にしていた。この記述は『源氏物語』(1001~1005)、『枕草子』(1001)等に見ることができる。特にこの甘さの記述について、枕の草子 42 段には

「あてなるもの*1・・・削り氷に**あまづら**入れて新しき**金鏡***2にいれたる。」と書き残している。この甘さも中世には砂糖にとって代わられた。現在では「あまづら」が蔦の樹液と分かっているが、膾炙されるようになるのは畔田伴存(1792~1859)著『古名録』(1843)の「地錦の茎に溜まれる甘汁」の記述による。

注*1:雅みやびやかで上品なものであるとの例え。 注*2:あたらしい金属製のおわん

恐らく貴重なこの甘葛の入手量が当時どれくらいあったかは分からないが、非常に貴重であったことは確かである。『延喜式』(905)に、甘葛は東北から九州にかけて貢進物として集められている記述がある。しかし、蔦から甘葛をとる時期は冬の時期であり、採取する蔦は切断するため枯死してしまう。当時の採取状況全く分からないが、蔓性の植物の9種を調べた人がおり、そのうちブドウ科のアマズル(オトコズル)Vitis saccharifera やヤマブドウ(ノブドウ) Vitis congnestia、ノブドウ Ampelopsis glandulosa の樹液が高い糖度だった。これ等の調査から、当時は蔦だけでなく、甘藷、山葡萄、野葡萄からも甘葛を採取していたのかもしれない。しかし、木蔦はウコギ科のためか全く糖度は検出されない。

身近な植物で歴史のある蔦は、家紋としての初見は不明だが、江戸時代に松平氏が採用し、8代将軍の徳川吉宗が用いたことから多くの人が使うようになり、現在は十大家紋に数えられるほどに使用する家が多い。また樹木や建物などに着生する習性から付き従うことに転じて、女紋として用いたのは蔦が絡んで茂るさまが馴染み客と一生離れないことにかけて芸妓や舞妓などが用いたようだ。蔦の家紋は関連家紋を含めて102種ある。

身近な植物だったのだろう、同時に古くから歌題の対象になってきた。

わか恋は 深山の松に 這ふ蔦の 繁きを人の 問はずぞありける

甲子園 球場悠壽 蔦紅葉

源実朝

稲畑寛太郎



蔦と蔦がからまる家

植物名について牧野富太郎博士は「蔦は「伝う」の意味で、漢名は常春藤である、漢字に「蔦」や「地錦」を使うのは誤りである。」と述べている。別名はナツツタ、モミジツタ、アマズラなどがある。また、木蔦については日本名の蔦に似るが木質の度がより強いので名付く、冬ツタは常緑のため、漢名に百脚蜈蚣、常春藤を使うのは間違っていると記述している。

蔦の学名は Parthenocissus tricuspidata で、属名は葉が三つに尖る意のギリシャ語で parthenos (処女) + cissos (ツタ) が語源、種小名は三凸頭の、三尖頭の意で葉の形に由来する。木蔦の学名は Hedera rhombea で、属名はヨーロッパの木蔦の古代のラテン名、種小名は菱形の意で葉の形による。英語で蔦は Japanese ivy、木蔦は Ivy である。

薬効はサポニンのヘデリンを含んでいるので有毒とされているが、寄生性皮膚病には生の葉をすり潰して、ごま油を練り合わせて、患部に塗布したり、煎剤として発汗に使用することがある。漢方では土名(通称名)を把山虎、栢石龍と呼び解熱等に使用とあるが詳しいことは不明。

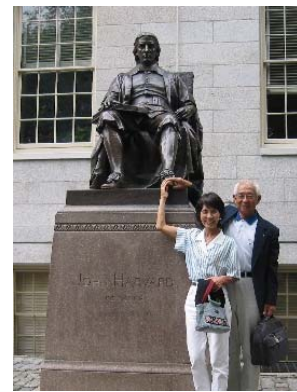
食用は、前述したが茎(樹液)から作る甘味料の甘葛煎が有名で、滋養強壮として利用したりした。

ところで、蔦を壁面に這わせた場合、長所は夏の日差しをさえぎり、断熱効果、遮音効果があること。短所は、壁面にキズや隙間のある場合は根が入り込んでさらに広げ建物の構造まで影響を及ぼす点と言われている。

私は、蔦と言えば平岡精二作詞・作曲でベギー葉山が歌う「学生時代」の歌詞をよく覚えている。

蔦のからまるチャペルで 祈りを捧げた日
夢多かりしあの頃の 思い出をたどれば
なつかしい友の顔が ひとりひとり浮かぶ
重いカバンを抱えて 通った道
秋の日の図書館の ノートインクの匂い
彼は散る窓辺 学生時代・・・

で、隔世の歌詞であるが、私の青春時代の心に残る歌のひとつである。花言葉は「友情」「信頼」「誠実」「結婚」である。



ハーバードの像



家紋の一部

